



此のまゝの書は
見ゆ

席巻

しそきしはりんし唐文
月子坊を竹魚魚子出澤
か

寸風

研以兵方志に巻の飛石

しそきしはりんし唐文

鞠の領口をく傍尔杭

角

氏より靴をくまの集よ

了る靴の心は御靴如

看板く立所にてかゝ寶物

竹の看版

伏見櫓く淡目八分

角

ウ

二保坊之下に隠す不二後

汗豪下心を舌白心

測奇

叫長く心の舌の舌

可笑

うしや疑つて孕む積衆

切つて来る黒髪云々縁の縁

梅寸

一目おのふく高き車塚

尖

湯気たのしみ雲影とさす系統

湯気たのしみ雲影とさす系統

所の毛しりしや影の魁

歳は己が横流してささる

和石

多き所の火くすけし新燈

古吟

縁をよそもよほさる朧月

風

柱儼くい庭前と踊り回

角

海海の博立の仰ホトケ新令此肌

若子やとす日流世中道
井伊家の博立の仰新令此肌

新定子先の親神の古柳地

御分付 尚

魂の魂の長心での樂 哥

貧賤と足しはるる若きて 寸

きふふと凌ぐ僕々ニ合むら 石

仁政の跡カシコミより下馬の二字

仁の心

刀身より入る鞘の 笑

踏^レも^レし^レ所^レも^レ朽^レぬ^レ天^ノの^鱗

竹葉

書^レ簡^と魚^ノノ^ノ入^レテ^レ徳^中

寸

多^ク目^々々^ク免^スる^ノ眉^目れ^はた

い^はな^りも^のた

な^らば^りて^レあ^す懐^ノの^切

憤^レ氣^を解^レて^もと^と禪^ノの^奥

風

乳^ノ香^子も^もつ^る寺^々の^味

奇

古^ノ道^を老^るる^馬も^もあ^らぬ^さを

寸

死^流道^ノの^幾々^々々

儒し所よなき 沁ニシ

漢如と綴ニシふやふと黄ニシ髪ニシ

多月小悟りとニシ笑く結迦波ニシ既ニシ

少所少涙ニシたたニシとニシ涙ニシ

角

葉

花ニシくニシちニシ我肌ニシ下ニシるニシ友の徳ニシ

是酒ニシあニシとニシ病ニシもニシ教ニシふニシ

徳者ニシもニシ名ニシもニシ宗ニシ也ニシ有ニシるニシ湯ニシ
病ニシもニシ名ニシもニシ宗ニシ也ニシ

舟ニシめニシふニシりニシ由ニシ便ニシ社ニシをニシ待ニシ

吟

笑

朝和を唯何の 州旅の候

吟

福貴をいふ 旅の市

寸

人小群 口明て有る 夏鳥

鶴

候所を聞えと有 地者

鉦

心もあはれ 長月夜全師

我を群 こと 庭言わぬ 也

石

所やあつ 月ありきに敵の

葉

並くして 人の心

寸

新新に唯々才華將

葉

今もくもたれまむ種種の揚

麴

東東の日の出を教らむ

笑

紅紅女女のくまをば鷹鷹

石

7

いと和の深き洞川

風

高き山をたれきとあはす

種打て終かぬのむらり死

笑

上上五五の

車車の刻とえりし世

の

石造り 山崎の 汐を 汲

東の 刻り 汐の 味 松凡

汐の 味 山崎の 味

書に 自ら せしむ の 記 哥

石造りの 海を みる よ 収る

山崎の 記

石造り

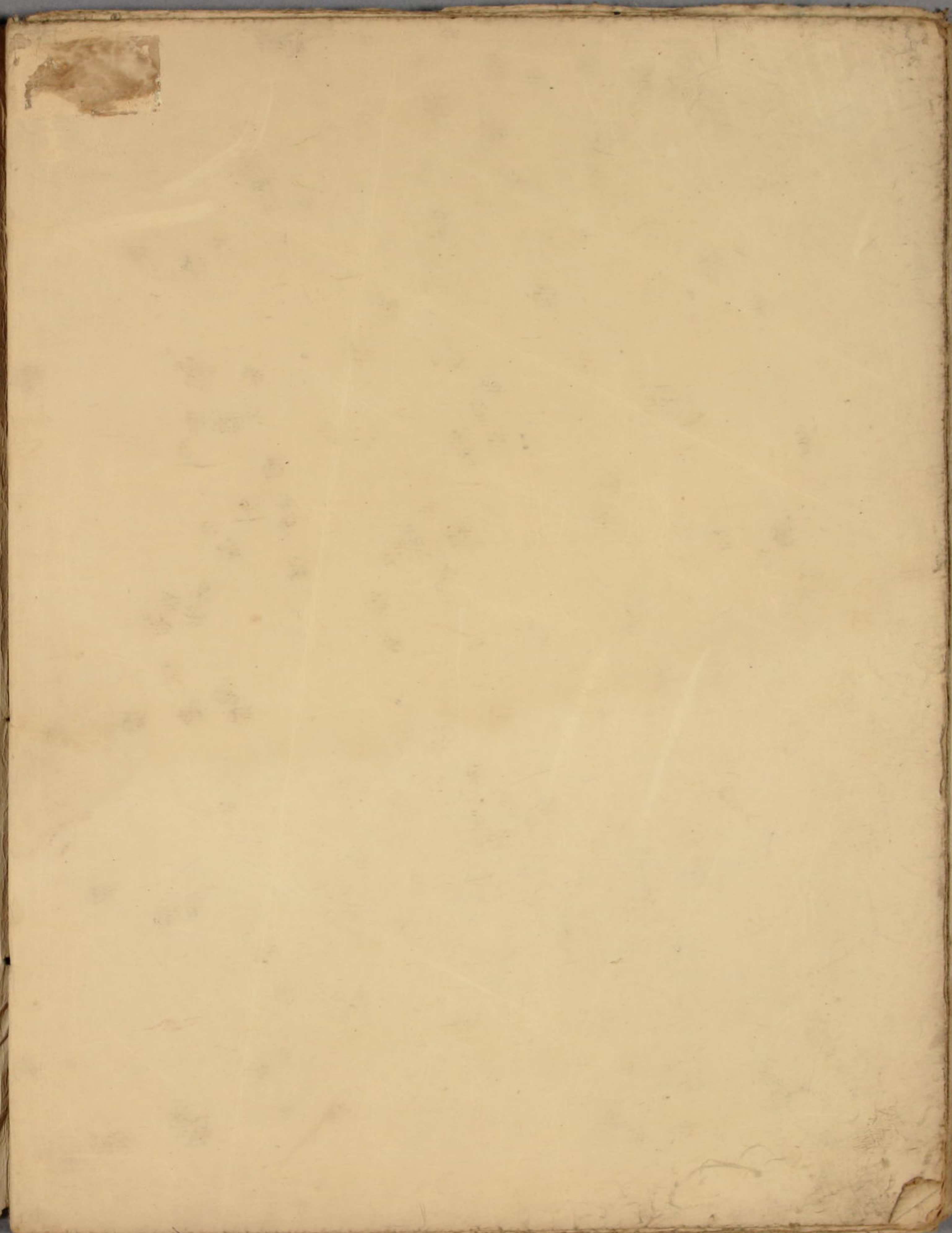
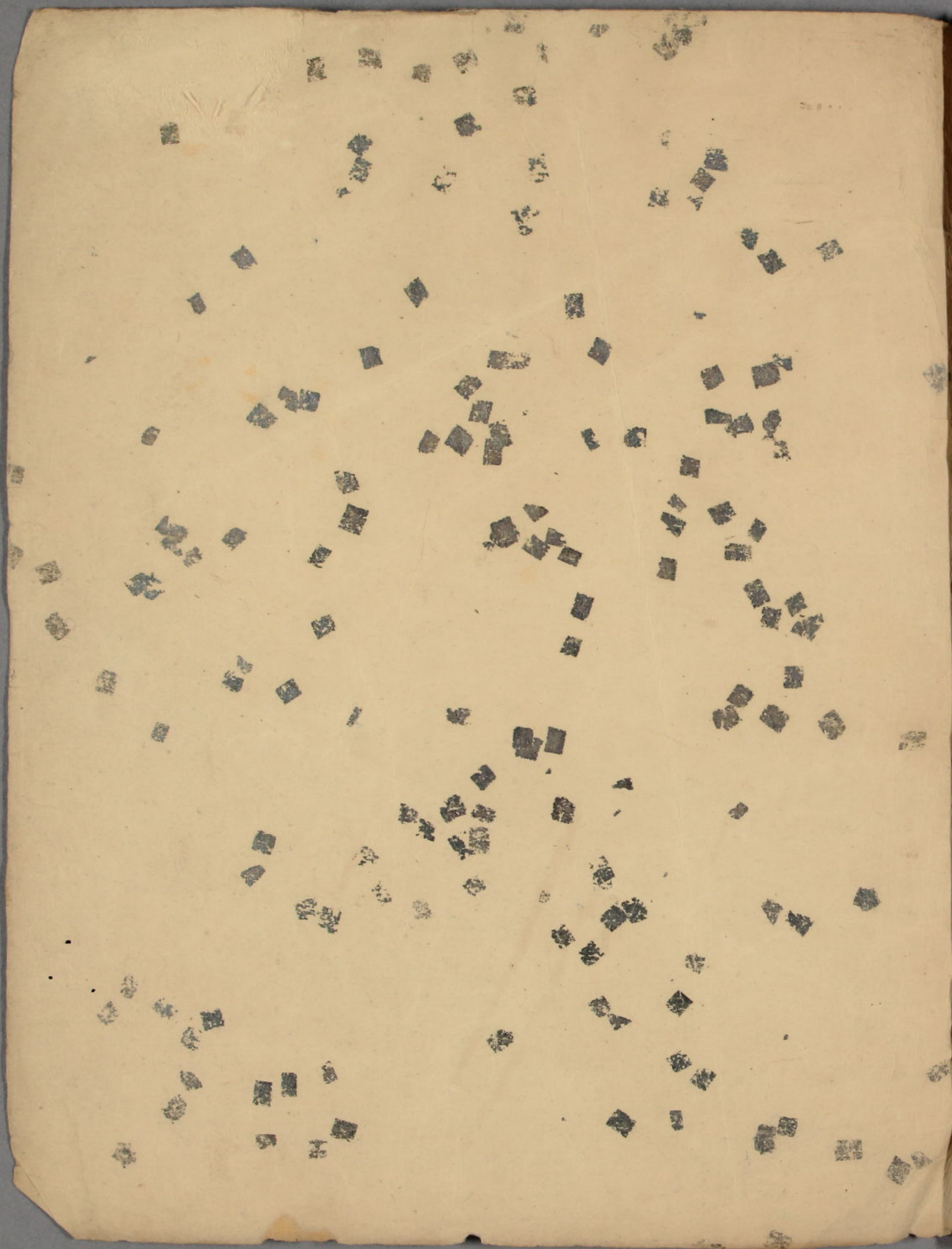
海

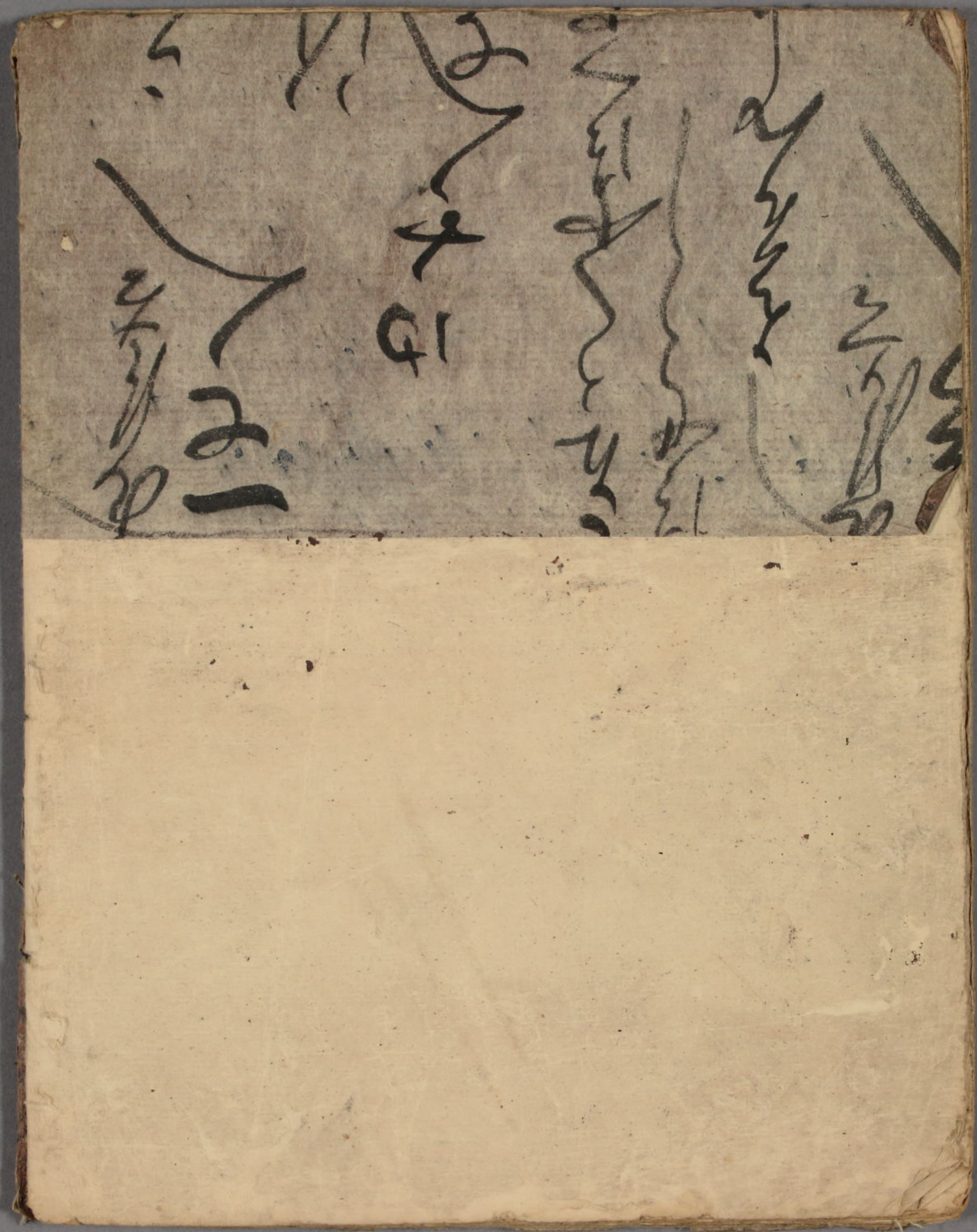


山崎

松麈	古吟	可笑	梅寸	竹葉	和石	寸風	劍哥	席角
拾點	六點	三十四點	二十二點	十七點	拾六點	十五點	十九點	二十二點

合百六十一點





Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect, located in the upper portion of the document. The text is arranged in several lines, with some characters appearing to be numbers or letters. The script is dark ink on a lighter, textured paper.